

「私とつまの物語」番外編

ばんえい3場廃止から20年 岩見沢開催の思い出を振り返る



▲盛り上がりを見せるばんえい帯広開催(写真提供・ばんえい十勝)

ばんえい競馬の新たなシーズンが、4月17日、帯広を舞台に開幕した。2025年度の売上は548億7604万7100円。前年度比で約95%に終わったものの、書き入れ時のGW期間中に馬インフルエンザで9日間の開催休止(ほかに降雪による中止も)を余儀なくされたことを勘案すれば、立派な数字といえるだろう。かつて存続の危機に瀕していた苦難の歴史は、すでに昔語りとなった印象だが、同時に4場(岩見沢、旭川、北見、帯広)開催時代の記憶も薄れつつある。帯広以外の3場の廃止から20年――北海道市営競馬組合で競走課に勤務し、岩見沢開催を支えていた南政博さんに当時の思い出を語っていただいた。

(フリーライター・内海達志)



岩見沢駅のばんば像

昭和22年、旭川と岩見沢で産声

まずは南さんからお借りした資料『ばんえいまんがどくほん』(昭和53年、北海道市営競馬協議会発行)をもとに、ばんえい競馬の歴史を振り返ってみよう。開拓期から農民の娯楽のひとつとして力比べのような競技などが行われていたが、1947(昭和22)年に北海道馬匹組合連合会(馬連)主催のもと、旭川で10月16・17日、岩見沢で11月2・3日の計4日間にわたって実施されたレースが、北海道における、競馬法に拠るばんえい競馬の嚆矢とされる。ただし、売上は旭川が208万円、岩見沢が90万円で、

期待されたほどの数字ではなかったようだ。この前年に公布された地方競馬法施行規則の第9条には「競走の種類は駈歩、速歩、障害、ばんえいの四種とする」との表記がみられる。ばんえいが競馬法に組み入れられた背景には、農林業などで重要な役割を果たしてきた産業用馬の生産振興や能力増進といった目的があった。

かくして、ばんえい競馬は正式にスタートを切ったわけだが、レース自体は(騎手は一人で)の服装に胸ゼッケンをつけて、馬具や櫛もみな自前、土を積んで、ねじり鉢巻で意気

盛んであった」といった具合で、のどかな光景が目につく。

1948(昭和23)年の改正競馬法の施行を受け、日本競馬会の競馬は国営、ばんえいを含む地方競馬は公営(主催権は都道府県に限定)に。ばんえい競馬を開催したのは北海道と青森県のみであったが、青森は通常の平地レースの中に、ばんえいを2レース組み込むスタイルだった。この「混合」レースは不評で、不振続きの青森競馬はわずか3年後に廃止されてしまった。後年、北見でも実施されたが、青森同様に人気がなく、(平地レースの中に)何レースかを編入する方法は失敗らしく、貴重な教訓とな

った。北海道のばんえいが成功した一因は、ばんえい単独開催にあったといえる」と総括している。

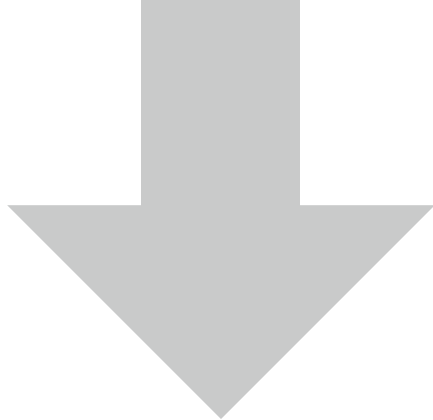
馬連主催のばんえい競馬は、思うように収益が伸びず、開始から1年で休催になるなど前途多難な状況だった。復活に名乗りを上げたのは旭川と帯広で、1

949(昭和24)年に各2日間、道が主催者となり開催。徹底的に経費を削減しての開催だったとはいえ、予想に反して黒字を計上し、関係者は胸を撫で下ろした。このとき、大赤字になっていたならば、ばんえい競馬の歴史は途絶えていたかもしれない。



▲岩見沢競馬場では道営競馬のレースも行われていた(写真提供・岩見沢市)

特に旭川の成績は秀逸で、2日間440万円を記録。1日平均の比較では、平地レース(約116万円)を大きく上回る盛況ぶりであった。ばんえい競馬を心から愛する人たちの思いが結実した「奇跡」といえるだろう。



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)